

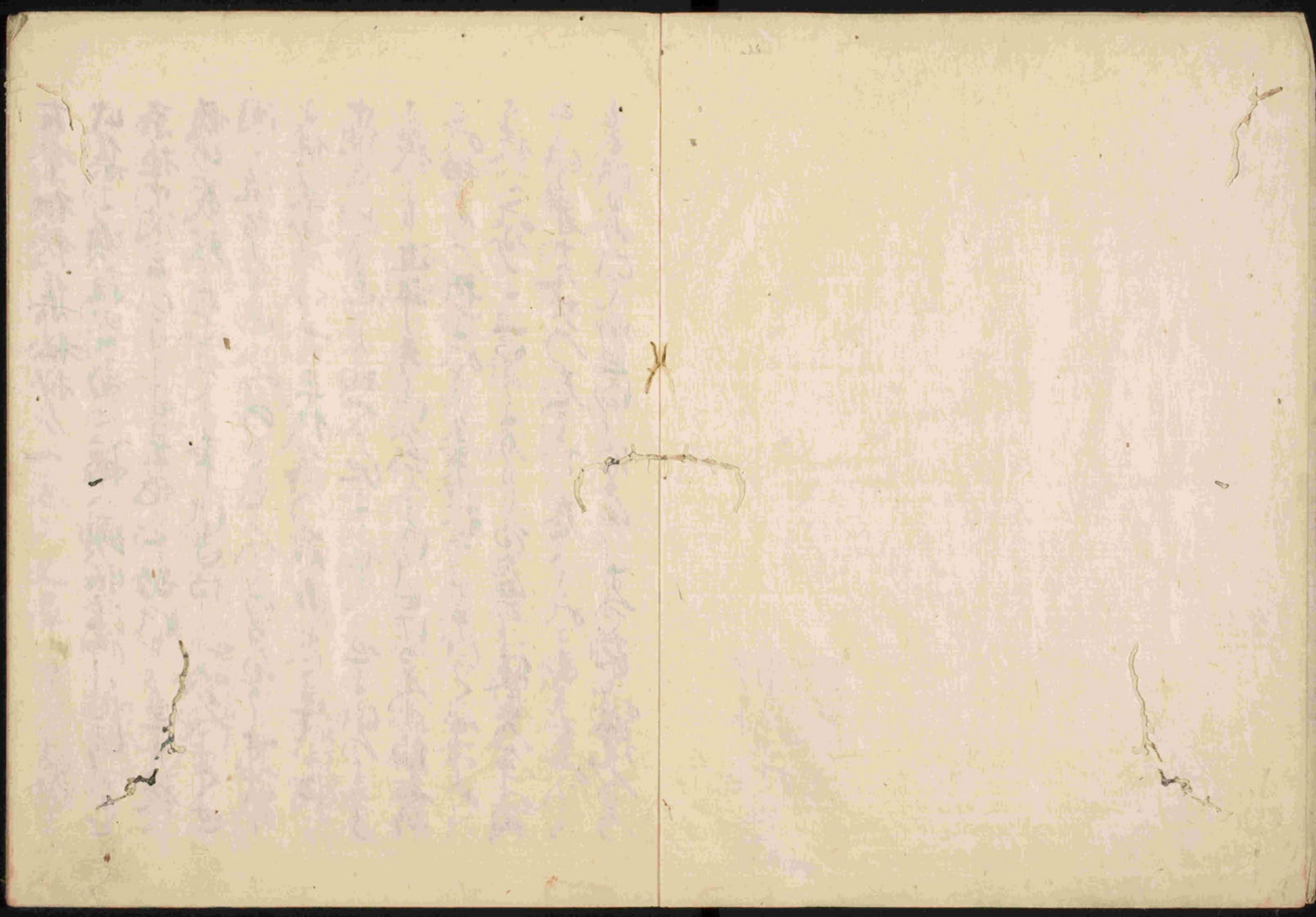
古今歌平集

卷之三

1
108
110

侍徳水錄





古今和秋集秘抄



は集上顯註密勅と海、顯昭法師、ほんと
京極中納言いす小是也と勅にちりて於
秋の義理とまへ事にきゆりえぐく世
間の流がよきのとくとの色すば
よ僻素抄とよハ三代集の難義とまくか
中納云のよきよりやくよせてせよいわま
う後も近年あくべくとけり人を仰る
ことゆりへゆよひ事、もく事いく事ゆ
は後、此抄は一くよりしゆくはくはくと
ういす中十九卷より卷をよみますかしく
もじりういて脚注、うるむまで家と餘鏡くう

受信史はひさびらす、ひも秋の通とま
ハ定家の院とくらむてすすみ、傍若無人と
すれども、基後、成りけ道とて、三代
とすく、和秋の奥義秘事にほのうりて、あれ
妙の風骨とえひい、ハ文治の上宣教（景良
きて新古今集の巻頭にえみ入る）のに
かくもすみらり又勅と奉し飯石の席と作進
定家（九郎）の家僕（九郎）の事と
のりけりや、幽益相應の時節、りとくと
うげりて、元徳政の事跡、い當流と相承すと
應にのれ、とくく一際の文庫として外失

一
事、会ひてよりあり三つも、海に是
懐へましまひ、事、事、所、所、ゆ、ゆ、ゆ、
きせと、うりて、三家の、み、み、強、守、守、永、永、
役、役、ト、役、の、や、や、よりと、は、は、事、事、も、も、れ、れ、ゆ、
い、い、行、行、り、り、も、も、細、細、り、り、事、事、次、次、三、三、里、里、ゆ、
と、と、アリ

ア、ア、ま、ア、と、ア、ト、ア、ハ、ア、人、ア、の、ア、公、ア、け、ア、ね、ア、と、ア、て、ア、上、ア、声、ア、主、ア、ま、ア、安、
真、ア、居、ア、序、ア、え、ア、夫、ア、和、ア、秋、ア、者、ア、託、ア、其、ア、根、ア、於、ア、心、ア、也、ア、發、ア、其、ア、華、ア、於、ア、氣、
林、ア、者、ア、也、ア、公、ア、と、ア、か、ア、木、ア、根、ア、々、ア、你、ア、之、ア、矣、ア、之、ア、榮、
和、ア、亨、ア、く、ア、さ、ア、て、ア、ま、ア、と、ア、と、ア、よ、ア、より、

世、世、の、世、中、中、よ、よ、り、り、人、人、事、事、こ、こ、一、一、け、け、き、き、め、め、キ、キ、連、連、
真、真、若、若、席、席、え、え、人、人、在、在、世、世、不、不、能、能、さ、さ、る、る、こ、こ、よ、よ、あ、
三、三、け、け、き、き、三、三、け、け、と、と、よ、よ、間、間、一、一、え、え、一、一、け、け、き、き、人、
む、ム、よ、ヨ、く、ク、う、ウ、い、イ、水、水、上、上、す、す、し、シ、う、ウ、の、の、ニ、ニ、ヌ、ヌ、と、と、き、き、人、
真、真、居、居、席、席、え、え、春、春、驚、驚、轉、轉、於、於、秋、秋、暉、暉、於、於、樹、樹、上、上、雅、
安、安、曲、曲、節、節、皆、皆、發、發、奇、奇、謡、謡、と、と、う、う、り、り、連、連、、、春、春、と、と、秋、秋、驚、驚、
して、して、も、も、う、う、り、り、は、は、序、序、、、春、春、の、の、年、年、も、も、と、と、出、出、と、と、い、い、う、う、て、
い、い、角、角、り、り、ま、ま、公、公、不、不、可、可、き、き、ヤ、

いきうへすゑ、はきう秋とよ風あり。

いきうへけらゆの公さきへ公の邊する
多めり哀樂の公と哀樂の事より事を歎
し人倫へうる事す。まもんちのやとおすりに
まもすむくらむとすりか心動於中言移於外
と詩といづりとも詩の序によづり秋とよ風に
まもとまもとよて多慶と人よきてふのえす
哀樂の公と聲よれと事人畜がる取えきし
もじへきうけり物のみ秋とよりといゆ
或妙のべよういとからまことサ一まとよ
る確といづり譲送すり用へすすすは一匠せ
向のとづり、いわふる也。

ちうへ入すてのめくらとうもつりにふる
かに神とものとれとかくと
け一匠ハ歌の臣とひり毛詩の序、動天塚
鬼神和夫婦絆人倫眞近於詩とづりは序よま
公とえてみじ藍うりもあくこいしより天せと
さんすはうぐのかと入てもううこくへ事た
ひりきうす一首の臣ようりていやすくこと
つゝくとくとくとくとくとくとくとくとくと
事まくりうきやうれ一首の臣ようちと
れとれとれとれとれとれとれとれとれと
りそでうけ毛極の公とすとすとすとくとく

馬籠す代集下の事より
こうし天のりけりきりるむたりよぎり
は籠のうのかうりとうり天をすりて後と
あるこれと圓闇とうくか後へすすります
これと三才と^{天人地}三才のりめり次第としてそれと
城の圓闇は三才のまわり人をすまひ秋とよ
是とまもとこれ圓闇のせうり秋の通りがりと
の風のまきげの下そく神と神とすりよつて
事とくわりす

古今序の注^古西深大納言公任のまき御ゆす
貫く序とりときりてうき事とめまとはは
一茶院の圓闇の酒^樂の主として差扱^{おもて}ひます

うちて二社とのまき事あくして石注とまつて
用あれり左三家^{左三家}の自家事のやまとことのと
らむ作り我國のせうりは伊勢信伊勢母^母に
の様子とのまくとじ行^行んとてニモ圓^圓の圓^圓
日午紀よみりかの二社の唱和のと葉とよす
公より事^事いえのうへとせますから二社と
えとおづけや

三のれとせ、いへりる事、
秋のとくへあうけりとがくくけりまつて
ままでくみのとくへあうけりとがくくけりまつて
くみをもとさうと六くくすふかくふくまつて
たれて下座^{下座}よりせりて、素を鳴る

卷之三

いさうたののめにて下するにあり 平声より

平声

思ひやも思はず事あきたりていづくと
つづきて大象のゆふみかくとよれしはるさう
下れりゆの力よりみこのゆき

古注よ、心地の事は、日下久の事ニ神代の下毛ニ
ナリト監姫と云ふ、天祖亥の事也。又云う事の
セラる事、いことあきたりし事くらむと
せりと云ふと、ト監姫の兄弟とありまさるひ
神の木と云ふ事も、いの妻ひまつとも、ひ
神の神の事なり、とて、されば、とてこのと
二の事もううてて、とて、とてと下るれども

このまのよみぐれと見て、とてはるの神の御心
よりひきそりしじどりとお神大よびりとすけり
うモ付下する御行をこもりてすむとニ有

九
八
一
首
云

のやうや 天よりとよひ
のうちもふる通 ととくふくしとみ
る 現よまとふかぐ、己の心をまわの
る 嬰のふうり 五の心をまわの
りよする極くよき ととくふくしとみ
く、ひと人數く ゆゑと風や、もるいものあらじこのむとくと
ひだりの心の外のそにへ、とくす 二の心をまわ
とえとせ とみ
らすきとくいふね 大雅考とそれによくとくよ
いといし 日がれは春事とよもじいのうとより、
と古によきいとたとつきつてり春のよとい

すともいふとよきりみ秋と、うとうとんりけ集の
オサ夷オサエよりけ秋のやぐらのよひとのあは
ヤアれいよひを秋とみてゆ
のほのくちかへてはすとのとのとくうちだらは
鏡のよとく、林とよじりきくわはとまく
リリソモトドリて、ハタチとふねとまくつらへ雲
の秋心もの角ハタチてよきれきはくらうとくう
ちやもり津せよいたのうとくまくすするが
して事のよきくさりり
神のねとくらやすとくみ夜ハタケをすす
古わよたれ、事めにくまくすしゆと真衣マヒ
よせ實ハタキ人度ヒタカといふりとくさは、奉事ハタシようす
よきよ、これとすみやはとくべつ
人あせとくらしまさのとのとくもとすくりめ
より一りへよきけ、
八重の秋の事と二りへづる、上よ、琵琶の音ひぐり
びひくりみキとくらやぐら人のせとくまうた
くまの秋、琵琶の事すと人のせとくはせま
くすく全もせとくで、くりうる事とくじ
すとのとくかと、天てす、りんごのこのみと
古ほのとくはく、れ遠とり天竺大津ハツヂすのとの
くとの姉ハジミとくらゆくとくはきのとれ
ゆとくおとくすじこひとくわく、肩ハラ
うほんのせとくし女と、のなまくと玉園ハタケ

男のまゝのまじめうみ羽とこのまゝかね
婿いすゞさんもおれがふるまちからく
うせつ福田地とよ妹女やひの川上りと大坂と
あわれてぬまつてめりおれの方一見ぐるり
みてむとえ鳥とうやじ寝とのいしむと

これよりはうなづく事よろわれよといふ
くこぬよのまひよ
としき不つてたりめりたうりげりて
ゆ東天の庭なほすまし始自下高山せ織
塵といゆりきのふとよりて御とぞりしがきみ
ニ連ひすへ次第よとゆくよたゞよ

らひしら 塵泥とちひらとよすりひらとら
もじんぐりふねひまき事あつよみくわづる
事運へゆくとゆうたつたりがれまほ泥
とひらとのよすりまくはよじきよもり
て空氣にやうえ声とく運ゆすものへひと
くと下のてよはよひよし事のれとよひとよ
む事、同類よきや
捨送集すらひらのねぐらがゆく思よん
すりうすと後ふか
もめえうひらひらの泥と泥じりよも
ひりと塵土、或送えりひらひら微塵とくと
が小人ほへえいの門の門の門の門の門

仁宗をものの佐よづきへ西ノ全その事されぬ
の不見んづくとづく

清背もきれりとれりんれそをとまくへる

應神天皇のあさこのうミと、大内きのすと
難はよだすと、方と、うちのじょうすにド
てや後りすと、應神天皇のうらよ、ひま
おもえすと、すゆよだすと、みよと、すと、
應神崩、きて、後うりよ、ひと、と、まと
位よ、くと、きよ、あすとのりと、大きめすと、
めうりえ、大切きのみと、义のほ事と、じき
て位よ、ひんせ、かね、やり、いすとのれてた
じよゆうすと、せ、抱と、三セのうと、佐と

じよくと、りくと、せ、ひよ、すと、と
うちよ、に、よ、ふ、い、を、か、る、よ、り、か、り、し、よ
大内き、と、三、け、く、位、よ、づ、き、と、西、は、じ、り、す、内、に
といして、る、西、國、う、東、海、な、く、う、け、つ、大、き、
の、位、よ、づ、き、ひ、の、事、ヒ、よ、づ、き、す、て、え、と、
く、と、そ、と、ま、わ、り、よ、り、と、ま、わ、り、
このえ、い、本、の、差、く、り、本、の、を、と、づ、わ、よ、す、く、
よ、す、わ、よ、す、の、ふ、だ、う、の、す、わ、よ、す、の、
わ、よ、す、わ、よ、す、の、や、一、つ、て、と、わ、よ、す、わ、よ、す、

わ、よ、す、わ、よ、す、の、と、つ、し、ね、か、り、す、

うねりは率安とくすむゆきと

かづきのむきうとくらのちにまづり

せまにアリ葉集すたて考へて下り

あるよとひ歌邊元のまわに玉平すやニヨウ

きののむをみづしてけりし福良はヒツ西

ラーナの木下諸兄公とひくにから

かくの回りにうしてやりすまきーりると

ソテ氣ののりうしまとく

きつひけとくすらの身をふあきつとれおひきよ

古にみりすとのどくまき風庭の空あはのり

よのとすあ碌のやよれりあがのなほの

一やあ碌の本とくは中院大内まるぬのまよ

中納まる相よびくら三ふに自生の本と
次空みくじくはくらみあ

舞や あふのまのりはおめぐらすくすり ては佛とふる精の
のまくへる見り

こうとす、まくらはのやくと
歌はのこぶよのや、まのむの、まくとくとく母
のうとくらうじじーとくらひすくまくと
こくとくとくとく

ともくこのこぬじくのうのうとくとくとく

かのうへ詩とくとくモ清音と詩有六義一

風二の賦三の比四の雅五の雅六の頌七六義の

中一凡雅頌と三絶と云つて賦比興と三絃と
よ凡雅頌と三絶と云つて賦比興と三絃と

賦比真、比作のがれのじうり種じまつ風と云ふ民
庶のよみのにすゞみうりてきづらひとする
「あぬの見うり」れゆて用ひ御事の二詩と、ふ
凡といじうりが、三国の詩と、ま風とうりは
雅、羽庭の樂と實り遊用ひる詩とあれ。又大
雅小雅の次、頌は宗廟の樂神の名され
ふゆべにわニ頌りうこの三詩は、とくに布
きのにてのうへん三経とうへんて賦の歌
直氣其事とつてなり事と立とときたい真
とかうと次比方た物とつてとくとくして
「被」うへむひ者よしと紅葉と錦よし
すうへん思のあつき事とあきとさうの
めきううるまい日月よも思とあります
らへばとあよとへりみじ次興、花事れやと
いしての歌草本は真とおしてえむりとす
すとこは三いと、布帛のねきのうへのきハ
かみとすとととととととととととととと
具のねまびとびすとうりて三津とみてと
六義のふそれ、賦比真雅頌とせせして、風の
中よ賦比真と見うりしてトの歌や頌よとく
賦比真うり、きうりとあううりも詩の六義、
三都賦、凡賦月賦うとううれのすよ賦
比も真うり、まじわすの六義ふとく

すりあひのまへかとつゝと六義のそれもろ
六義より動作のがよきものと集の取義
れいです。至る事とまじめ

とてゆと

六義のいづよいたへた。と手書へ
風のかとくまとよがするをよひとてうど
じみがす事とあはせすとてのむへ
じみがす。取下の向ふにやさみととてえま
るひときりとくらうとくらうとくらうと
くらうとくらうとくらうとくらうとくらう
よう事のれんとくらうとくらうとくらう
たりは、ゆくやこのふえすり、漁者へとくらうと

梅萼から冬入りてのり、陽春のえよ東
しおのり、うるうる大内きのとこ年
月は難波よましくとも西へゆアリて住よ
ゆきよきまと春をうりしむのくよと
よし結婚とゆくし西端とあらゆるがんよ
あれ、みう義よむと貴くうた義正の六義を
送り、ゆきよくもととくさんしてられと
いがすりゆきよくまく六義正の六義を
ね送り、といね。

二よがえりをうへ平声とへにまうてあへ
賦の外、物よことすとけり事とくとく
とくとくのまへんとくとくとくとくとく

とおもつてかくのうづく

ゆゑよ思ひくものいなかよしにゆきよみを

ゆくをよとすそまの事方よまどりを

よとすそまの事方よまどりをよとす

此の如きとてかくよこをもあわへ

とまじめにほきつてゐるが、おもむ

せうの事のやうにやとえにしましてす

とててまことに、演のまことにれども

是の事はまことに、演のまことにれども

とててまことに、演のまことにれども

とててまことに、演のまことにれども

とててまことに、演のまことにれども

とててまことに、演のまことにれども

とててまことに、演のまことにれども

とててまことに、演のまことにれども

とててまことに、演のまことにれども

あれ、事のうのりたつて、とあるや

古屋の公秋、現量の事とて、賦に量を定め

ソリのまきをうとひておひすのやまへと
一さがりあすところもや

火めえとやよへし

或流とあきはまきとくとあらわすと
すとひそむうとまうとくとしの覓のま
物とりしづかへんすのまきをうとくの
まきせとくとくとくとくとくとくとくとくと
山ちゆめとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
このまき青梗公實賴の詠へ古今集詩と
さくまきたまこしるつよ核のうきとまの御とく

じいよひいと

えれじてみすりにかかみの三葉のまの外と
せまつて一の詠言のすとくとくとくとくとくと
こきまほとくとくとくとくとくとくとくとくと
ハ陰とすとすとすとすとすとすとすと
まくまくとくとくとくとくとくとくとくとくと
みよとみてひづ

火めえとやよへし

集成功

ちほつ六葉の頃ナキ、義盛徳形容告於神明と
火も持の言とすりてつづり詠言かづ被底よ
もとよじきしといすといす在と春日野

火めえとやよへし

六葉の頃えあるときまよえ

郭ふくらや、前のやのまかと云ひてす。か
今まはがのすけ集を多六集と云ひます。
えきりや三つともまつ六集と云ひてゐるが
まつりやまつりやまつりをつくるが
しまのいとくはりとくはりとくはりとくはり

このかのふじれ木のへ三の事とすり
せゆけりてあはきをよか。めぐらうの
ぬえのふじれ木のへ三の事とすり

しの承る所いの
ま三のよきやくとおなじの承うめりは
ゆきすみのひづれありとひのやうたむ
はせとやくとんじてゐがよるねうゑ
天より人神のめいといとすへうすうの
あいとい、因ゆえもとい、さふらふにいの
ひのね、とくもくわへりあらへりとせうひ
みのじつとくひつ
今もくわくわく者にあひゆくとせうひと
こゝのひとのひととくわく、
秋のよみまきとくわくを良むとせうひと

おうこいのこもよか良むとてけ

女郎衣

とみのそひらるもひやう

とくもととけ

ミのとくとくもと良ととけ

あはぬのとくらわやうきのとく
りキの下くまうます後ちれとくわなを

草の鳥木のうまくとくわいとくわ

鳥とくわくわゆとくわくわとくわくわ

水のきの鳴てとき風とひかへてねよす

ねよす

さくじとまくすりとくわくわとくわくわ

野中のれとくとくわくまくわく

くの野すの水すの水すの水すの水すの水

秋人きのトモとくわ

秋森のトモえびくめうらやうらう人のね

のうきの鳴りとくわくまくわく

歌のうきのねうきとくわくまくわく

くのうきとくわくまくわく

せよあいとよまくまくわくのうきとくわく

うの川といまくせやとくわくまくわく

うやせすとくわくまくわくの川

今うのひよすとくわくまくわくの川

かにんすとくわくの川

そすうの川よまくわくまくわくの川

家のるせひ流き不動の義とれもよすの御
禁忌よりへ未安或うすゝみりた煙とくらむ
しとて黒あくすえのふもれよすりそくは不
利のふれへとすりせよの用とうり又不三の
美ハ東莊家のる画室家家のる相とせよ母妻
同院家家と、不三の美と用よとの用とうの
煙よううて人と寔とうきゆりわくの煙
人の思ひりりしくすよめきねよりのとく
とよふ人のよとやし、税のつゝうみ長物の
つづりゆきゆきれひるすりとんじえども
道とおこりてすよ貴之ふけとつづり西税せよ
すそよとよま不三のひれすかわくじけり

としとねり、人の面よそく、ふへ、伏見院
代よげ不三不五の事よほざる世はる五つア
弱病の臺状ゆきり、や

きのいにじりそいりあり、けり、

天武天皇に、久在原えようります。高市度重元
那く度重元

年一平城ようつゝ、馬と郡えぬ天と、不京天城
よかとそぞく、それえで、えにまた、一子に平
城のあぐれをあく、日向の事と、とくとく、天と、これ
よ三ふさの事とえ、天と、と傳、す、一子に平
不京凡れかわて、天と、そのゆゑと、うつわゆる
有き三のうぬまえ、との人まろみじすのりと
うりけり、

背まくらのうわはまに在りて人丸三佐の事
浦はあくをえりとつてもあくをうへりとす
ううんけ序とりし禮極とすつすのりと
秋林の聲へ草書の達者と草歌をひき
こよと夏歌といふ

これあく人をさとあととすりとよすりや
君をれもとこの通とくりゆせや君をれ
とよくべえとえ育とうしてのく人よとく食と
股脇耳目とひてりいり目めよに下り君れ
のそへ立つのうすりうりうらをうらを
人々人臣とて

秋のアラカシカシ紅葉とみその前書き
と見えまい

大山の前書き又其の後
じうのりからましむかうりよと薄中でだくえ
春のあたよのひの櫻、人丸のよ雪うとの
うん背る
人丸すきようのひの桜とそとてり事あえり
べと君を金井のとくりとうひんよりうき川
の紅葉とくつてうのひの桜とくつうきと
えうむけりとくつう一と人丸すけめうりと
せよにだよとくとくう一統と接続すくうの
き野ふのりをうそとあんまうほこう
す作あそぶわくうす人丸歌とくうや生
れりとくう経うとくう金のすくとくうや

背づきありけり身うちもあまきさん
みのきのうとつひのうり
ちゆうすみゆめの風とゆうて人凡て有り
全く、あへがたとん事とくらべて人凡て
よそん事とくらべりけり

こうとくの内にいふ人かくわう勝とよじ
れりまきれ秋とうそとて人集とくらべりる
三家と自業平云たまは不審ままとと人凡て
人すとゆうこめへすみと人集の者
やうとのトの内にれりまきのすとくらべ
万葉集とうけらるりとつせん凡て人集
よりまたれり万葉をのやすにさせむれ
りてつきの内不審のへくわらり豊
れりまきれ内へ食事へ身とかくんでれ
りうとそりやく甚しき人集と探す。
にきて近ちふすりとくとつまきゆるや
べにのゆうじとくとくとつまきゆるや
同の世よりとくとくとくとくとくとくと
へふれゆり其えつとて万葉の内ゆる
ありとなくかと
かのゆうりこのとくとくとくとくとくと
すくうりけり

真石序云者天成天祐祐侍に全撰り萬葉集真本
来時歴十代數過百半利奉よしとあらわし

武天をよりかへゆかとそんじやる事と云ふと
さのうとしやり大國の小脱展のたすにしろ
立ちすれどもあらへくのうとしれよどり
は集のそとありてとすりかくのまこと
えへすむがよきやうといねうちわうちとが
のゆうの門のうとひきうちみ文武天のそ
に川よりうちされつらずと左の方へうと
のうとがれとすむ真前後の所とくに平成の
次うへらとせのうとすす大切等えりに
ゑ年もえうへ百年えりに接
果の歎と事。ナガヒムニモ臺児アガル
み事序と送り「わたくゑり、相者四人の中
左列、卒年の内裏と奉を、よううたけ集の言
揚部とのシテ、まの内、正月七日崩
り、そのは聲、春秋みけ集アマミヒホフの
死体を百人以上とせんと、とあすべき
せ、ナキと云事、せのうとひきとよ、平成
十六年、度はれた文佐清和湯成、え各アタ、醍醐、
トヤエお達アマツ、をこす集と、平成天皇御
し竹下ノ一貫三つ、ひらり置仰、御貢禁
時万葉集ハシス、アリはれ。江と又室、ありす々
而とたまひまわうの葉、およほまづると
とて、ヒテヘキをうちまく、アリ葉集大國たよづら

うへ東北の山もひまつる年々もすりゆく久
くものもなき也。これよりまことに
すうてゆとりて。もと情ゆづくばたれいゆき故
鏡よ一月裏裏、至る内時猶諸兄弟とけり。故
にて往へるとつり。うへ雪まゝ時つらは
りと大國の世よ。うねてかと枕うへられや矣
よちのくまよすりやこくしりし文宣のめ
足すうへゆくとみのうけよすしてのまのまの
事じ。うり人の篇よ。ゆく頃候予はば
動文ふう。

おのれの事うそうしたままおひるをじてゐます
大向こねのまんとよべ

情心遍照、秋空無際、一念歸來、

真石序云花山僧正左得秋林火具詞華而少實如畫之好女徒勸人情

外火其詞華而以
俗名良峰景貞名徵翁青
素性淡雅其才也

生食のうりひゝはのひのうりてこととす
序云在原中将の歌其情有餘其詞不足如姜之錐
少顏色而有童音

やんやのやもりて、いとくくみとひやゆるよしにす
序ええ琳巧詠物歟其貯近恰如貴人著鮮衣更
棄文琳やもりて、よや大半の試の府りのと姫
のよ、今一まとめてあさみよいく事うう

字の書きどんことえがすくにほりどち
一、かず

序云宇治山房喜撰其詞華麗而首尾停滯如

望秋月過曉雲

は序によらず不和べきうふとあらずともあ
後一首といへども二るとる事は多寡集は
換するは喜撰、秋とアリてのと云ひます、一
首のうりは歌とてのとアリ、歌よりはじ
に背くきこそねの羽かうすニマ一肩、歌より
きのと仰りへきいと音つゝおきよめや喜撰、
むすの式とひあり人なり

とのこまびへづへのかくりひの流すり

序云小野小町と號、下衣通姫と流せん蟲を害

力如病婦と着花粉

小野小町と用國郡司女
美和比人

か通姫と免恭天皇の女侍や日か紀上人より因
よふとひとよし、花粉と假稱と云ふとそ
大伴のうわく、うわく、

序云大友黒主と表古猿丸大夫と次や頃有送興
テ貯喜隠如田夫と息花下

猿丸大夫と慶之猿
大伴黒主と和比人

かあよ、ぬすゝきのあめに正に正うすと四
のせ九うりよおじうりあ。

醍醐天皇、寛平九年七月三月文禪の事ありれ

り延喜五年まで九年、四年の内と一年とすま

夏秋冬の一年の半よりかべたうり九九年
のうりあるとすや

書或乳院の東の山のうち書を
うりて下は書所、情社の山ありては
そそ井の山、富彌書所ありては
とくに取やま之は山へ頃々浦と出で
又仙石序、いまだ月にけり、真石序、いまだ
れども、ゆく紀源とよどく、ゆめの山へて春
ノスモ、わざうらす古今集本の山。奉り

おゆの自業の、うへにかとのせす

卷之三

その四書の教と以此て

又御みゆにひそむ君となりし 沢す

いと遅い年になつておまかせ

秋の夕暮れは、さうすこちとて、

おまえさん娘とおもておもてのう

お汝のセレナリオをさうめんと
おまかせする、此でござりよ。

卷之三

是の下水をもて一歩

入處のまゝこのおは

うす川の歴史 うす川の歴史

世事より身を守る川山

「道、おもてとす様のえり

之方也。此皆以爲
之方也。此皆以爲

序云臣昔宿幽艸齋也。今豐若空

まくは國等の眞木の序より
而安樂のとよとよとよとよとよ

僻葉抄は漢高祖のふととのう

卷之三

今まろくすきよしと教へとちくわりゑ

直石序え嗟乎人丸既没和歌不在斯哉端語
孔子の文王既沒又不在云乎ニハ文勢とすしてけ

は詞ヲタ

うぶやきわいとだも

朱の句は文具のすゑみづかくにひるぎ
あげんするのみとまとこや
ふり金ばゆきを今げまわらひ
まくしりて文具とひづけゆく

古今和歌集卷第一

年の内に春、またうひとひと年ぐる年
一首の叶ふらうとふ文字三ありとよしとよしと
「同合局」とうそと號のす前塙の集よこ達也
神じらそじすし水うづれと春とよまふ風や近ん
はす小三多の会うり水とじよく夏えこり。をき
まくは自おの事すりじりての病候よひす
さかづかゆきだらまくもき

前大政令にて仁良房の事

二条のきわどい事のやとてきらへるは
二条のきわどく清和天皇の后陽成天皇の妻
陽成天皇の事もかうとうする二条の后とお
その内息前とトゆりしや

春の日つえよめりねまとかうのをとみえよ
ちの日つえよととくともうま。

寛平の時きよのえのす公

ニ通ひ七条后溫み大政令皇后の三女也
春日野、アハヤキとみえあてうぢゆ理あり
げ一首の詞うくて、水うづれとよまがなに
に和のすとみえよとよしとよりよ

え各天皇、にぬ天皇の御子、義和年十四齋

トアゆりしの事あれ也

我せこうれんもさうづくに野のよと文也也

お宵み、男女上通とこの秋、男とよきは
春あ小川の河とせんじやと水がてまく
わらきの木と桜の木といふ。
さきの院も、山内御所野よりさきのえ
の行かほ

世下小ぬえて桜のうらと春のふれ行け
いたての朝あく不あとの二のひかり不あ
衣と里人全ひぬけまくら
まふと、うす、空とあらぬはたと有むをよみ
賄舟の音の行せ業平すくひすとくす
すと、いふとまきすくとよ洞よかとて
きくと、打墨してうらゆこすて四
うりかととぐるうりけ。まむとくくに金が
ひきうとよきうむと賄舟にてまくと問う
なふくううやうめとまく仰うしよしき
平の院秋合 亭の院、アタマの山の山、
山の南から西洞院の行
春あのじらえきのうん

卷第二

沙をくらえとて、むらえとて、むらえとて、
日をよ初方今よあまとて、承すとす、し、
よとよと、のせよ、因みくき、はまよとあら
春あのじらえきのうん

吾家の波長一帯力とよ城のりと帝力の波
すれど津と云ふ

ありとおりアラのやうあれあがすむまぐり
相武の門平政成がとうもきてのう平野の
外、ゆへとかまくと大同大和のうへふるに
雲林院のみことのまよ常康就立の事とけ集ま
に和のすねのやとて

えな天官のことを仕のむやわのえれとよくわ

平野の女也

花はみうりかづる

むとむじくを

卷第三

三月また山郭ふとまき風とからんえつゝ
えきい舞ぐまのひととて日とて山に度櫻小

この初め

たりひゆうときれい山郭ふとまきがようりつとと
思へばは、ありうてととよとよとよとよとよと
りうしお、ぬいと山裏のなととよあがく
とがよすひと秋よじや

もとへやゆまき山郭ふとまきがよもてきにし
へととよじくのうほうり青じてとよまき
よじく停案抄ふたとにうりて平声よも
連作りとくらゐてとこまくおうかくへた

すすへうたのへのよかといとよじふうりてあ
すとぞまきたりこまくらとれ色
郭ふれくらうじのむづきせのすくまきゆん
おとがくよ、我もうさせすすう我まねどし
くとようか衣いうきせとつんとみの内
まもくふうしまわふくふはととくめし
うと達まのふくふうまなづりもたらすうを
は花屋屋出で不除世間はや蓮を在大

卷第四

ののくわんせ

逍遙とくめく

やまとよもよひの角くさくま秋やま
を人船よめ。平年令の頃とくまく

木の角りりる月の氣をまづくの秋まぢ
木の月とくらむ月とくらむ月とくら
はとくら

ばえまとわとよじまくはとト唐もくりには
とよじとくよすえもまとくまく
くすりの日。木の襲芳舎とくすりのつ
まよ

日くの夢門まくはとくまくりには
火打よの袖下のるよよけくく
花よすりとわるくりとす良をまくらふま
石よすりのそるくりだりとよるとそくは
のやくはとだりとくやくよすり序のちに

くはけのすいかうるねり
秋のよやうりすすめ女良むかひしよきひくを
せとよむのあとしうそて宿かすす秋
の小やもんくよせ

朱雀院のとみかうるせ

朱雀院へ後院の看うよ宣平はまこと
ひうのときしよりか鳥をすじやもくと
あらうしてすしもきまへ女良むかひくを
平宣文 貞應左と貞文とうら三の毛毛

卷第五

吹がふ秋のまわせりきじへ風とのうとよん
じい室のよじふとけ風とこうてり車のあく
ゆるすり秋の草あらうは風をまよふと
風のよじ風とより
ちやうかむいひアリナガハナケラウア
トトチ一公とへりてをもううとすと牛と
うとよばせううよまのまよとよ
うとえりきわう秋嘉のものひもせとほ
ねよきとそもむの行きげきのうりう
て叔あすんとよひ

菅原朝臣 延喜元年五月廿日左近太宰御書

岡三年二月廿五日薨於配所 五十九年三月

廿日復奉官祔太廟 賜位二位

あらうへ秋きき可やさうもんむれうめがくわ
えうへ秋きき可やさうもんむれうめがくわ
秋えみんはせやまうんじゆも秋えみんは
一やと思へると大澤の邊の底にさきうへえ
池へうこ小柱といれどよや

ゆまのかくよ舟

駕集の長うにとのゆめ舟かへようてり
ようり舟かすと舟としきよ

さけりきよまくらうる

わ行けよ下よみくまき

奥ひのそきりよちむかへ
せきとすよけよみくの西へは移うへ

卷六

大モノ月のえへきよれれへようえ來へ
れへ大のこりよ月のえへ来とるや
ありえへくよまへし月のひづ湯とおま
害の消といまのせよものへ用れとく
えへとより下のをまのせよもへ

三のふえ

川の跡れへりやまのまよふ正美へ

「うと」極く集上春秋の部みとてりする者
多く、二郎百首例どりも志貴山越と春日上
用ゆ

物のあつたとす。君はまひとぞめうじこまくま
物のもつてほひといふれどもれの君とあづか
とそりきともれの君とつへとけむとよこ下
うすと連と物とこそんて行まく一同意す

卷之七

よりあらゆるやがてよき石の巻と女もまた
わざよやがてよがれいあんのひとと
じまとよきよとじすうとじつう
音のひづてつづくじよもあらがとやがまく
あきはるやとく様よきこゆりゆや
だいよまれ月日ひたりて表をてと見すが
おれえての角えと不覺との二ひさり

卷之八

寵チカラ
大和守源精女ソノタツコ一三
或書主脚シテ養母ヤウモ也
りやのじり 造唐使ツヨウシとよ一
ゆけりりとよとよ

三九
悔集國にひの遊女涼をつ女や

山さきより秋みの森えどとくりよ

林さひの杜、大齶より下へ下へんとふさき
しゆふとの林さひへとくさきとまづ、是は海
の島、國あつ春めりじやのせよがういのうりと
ひえわと林さひとよしとき
ひすじまくはまくはまくはまくはまくはまく
そいすとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
秋夜の花とひゆくわざとあとがくとあとがく
林さひのうへじゆめき、五聲玉とよもれ
よもれ

おきくじよひあらん者も、おまきのまくとおまきの
まきのまくとおまきのまくとおまきのまくと
いんとつひしうる事よりうすまきのまきの
あそそきうんとうや

卷十九

二十四 明月と事よ、やまととそで

だきのくじよひとぞの門上

小野は曾流寇の事、^{ナカニ}仁和天皇承和五年一達
唐使上りまよ、一の船よのすよ、^{ナカニ}海き
うよしてかうよ、^{ナカニ}並覚大師因仁は唐ノ
時ハシの事

唐衣きけり まきかへば ひのきの木をもれし壁
けすれのわのやとつる。あまみの向ひともう
りうち坐してよじけり

卷第十

物名 よろてのわの名とすのキ。わへても

ねがく

くいすとの三毛ひく

をの三毛くしゆきくひなうきとふせこ力
うたとトのすゝやしもとあそびようと
てに 香母ごくふじよるまのを

きり

薔薇べ

きらうのを

桔梗の花

ヒト

紫苑べ

セアシのむ

龍膽の花

けよう

牽牛

セアシのまに

三毛んけ

じととゆりりとへやのあへよとよじ

きふけつりスラマセリタリと

のとく脊や易のたすりすり用ひけりむ

ひりんまとつて

ヤキ

羊蹄

ナガミ

とく本より知母とよひと

ふや

羊蹄

ナガミ

とく本より知母とよひと

ひそみく 小竹の皮は青きまのと見てのと
ソヌ水をとまくとよじ一え葉の類

百物香

香の名

すまうへ 事と本よすへて はようへ文とす

まき

春 ひすみかゝへが ひらかわめのるを がくもほ
タテ まきへ はなへ おはなへ まくまくへ はなへ まくまくへ
せのひ

巻九十一

右近のじまとへひとうの日 右近の藤村が首
六日シ ひとり は陰陽のかへり禍の尾とリれて
きりゆへ いのわとす

ひまくのきへとや かくらのたと ひまくのきへ
だくくのきへとや かくらのたと ひまくのきへ
そと おと 人ひとを 大おおやかに やけりよはす
そと まへ しりまへ そと ひまくのきへ
よつあやかり そと ひまくのきへ ひまくのきへ
ひまくのきへ そと ひまくのきへ

ひまくのきへ ひまくのきへ ひまくのきへ
我わとくのきへ ひまくのきへ ひまくのきへ

卷第十二

すらは下も小

おま跡よりすら下から

ちで風思ひの意とよへ
れりのゆきすがれ。ねむいは
三のいとよけ五月もゆるはとよき
りしてやとひ、秋の風ひかみとよく
ふもとよとてよる人をきく
志つづく石へだせ半のつぶさきやとひこす
おまくさせのやあまきゆとひそるを
とてくわうとのふとよく

卷第十三

人よめうひ見て うすすこめきひてのを
あうひゆうけよ あうひうとく
光明のまほまほまじりひの空ひるひよ
後毛の院の晴古今集の面白すと三家清
よ御のうつはあくかうひすと存りひとう
おうちひりくうまくおほくよとさんと云ひ
せすひもえきりよみすくよもくさんと云ひ
匂ひのうすとくまくよみく流てうにすらし
まとのせしめひすとさんとがくのを

卷第十四

若といたるもと、かくあるまへははがく
おのやといふて、わざとひきとるの後
とそうして、あくまで、おもとくとて、
おの門のよしの、ゆめとしまひ。

のゆで、の、え智多言とし

ほと思ひ、まえうますりと、おもひせし
からりと、おもと全え、おの、くわんと
のじき、もとと、よし
ましもひすの、川のとく、おもと、の、お
河のとじ、とく、とく、とく、とく、と
く、とく、とく

卷第十五

月やの、春やの、まちの、おおきに、みどり
け、首の、月、じ、の、月、も、ま、う、春、じ
の、春、も、ま、う、お、の、ま、
い、ま、事、や、り、こ、ま、り、く、お、の、ま、
て、お、と、こ、お、冷、月、も、ま、神、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

のひがね、まことうなづかひをもつて、
おおきにほんじゆくをめぐらす。おおきに
かみこむと、おおきにほんじゆくをめぐらす。

多事にてとくに我の心は、とおへりて
いとおは、おおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおお
おおおおおおおおお
おおおおおおおお
おおおおおおお
おおおおおお
おおおおお
おおおお
おおお
おお
お

卷之三

えにてうらやせやのむぎをまげ
ゑにてのむぎと不見の二丈
じきのまじゆとわくよへたるが

卷之三

漏て、かくかくせん
あまのせと、川の
とくとく

姫君のじわを歎くべし仁久良房貯宣公是
に連り忠仁と前太政大臣と承相宣公塙の
太政大臣を以て及ぶと辭して前とふれ
まきうへ立家へ立てり

こわうのふれらのはんせよよりうさんうさ
ちくはる別れはじちらくよみの秋のむくつき
けよ

まほ人の宿よまく都上りてねのきくとす
まほ人のすみ跡はよよよの風とびりを勧め
うそひ人のなまのゆうとつ

北かくと夜下りんをものいわ野とやくせんと
ゆきのからひあくくみて鳥野よみよか
よじ黄鶴樓より人を來童鶴去此は空余
黄鶴樓空鶴一去不復返ぬ雲千載空庭
ときま

石川かわやうまくもくらきくとくの意

卷十九
限うきえつるかとりひくすきこくゆうと有る
いとわうとりまは平すわわの作花よきとる
ておにこのかくとまくにけのうとくく
しゆきとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ちふのれとくとく

母のよきりまくら水かくして
業平御の母は豈れ事にかくとひす
とひつさきりの

水のふようく水のまくらうそきりとてうやと
君がかれは水水く水とうく水うくかじりへ
きとふかじる

女房のまくら

女房のゆくは是盤あとを

巻かたへ

文家のやもひて三川のどにうりとあふや
のうへ縣やオヤヒシカミササギとよま
ヒトスヒヨリハナツヌヌ浦より、ひきまにあとを
ニのまくらととくとよしんのうにねじ
ヒトコトよじてくに解あがよもとくる(き)、
ウモキ事ふ事をいれといたよみえな、ひ
エとよじてうりてうとよきやり又あを
のゆりうちむきびとく解とひやせが
りゆくつわやよきや但常家こととを
そととよじ小姓すべさん
りううのうへ遠唐使のわ天下すりと
よ)

卷十九

雜駢歌

長秋旋頭うふとこのがと歌され
よすり三きとへりて、とじつ風かと舞を
して、とよじ

短歌

け集の長秋のを因よ短歌と黄え書り
事大す。疑へり紫集よ長秋とよみ長秋と
らしても秋の奥よせ一字秋とよすうよとる
反秋とよすり又并短歌とよすりけ集
長秋みるゆ中よ史は事は長秋の奥よせまの反
秋三首アリナキと二三ノハメテ短歌とよす
同とけり。やすきとね者の長秋とけりとを
一音のうたえとニシム事やとよすりとすり
み後此の子集よかうとけり今のみとりと短
歌とよすりて、とて空巣はう一度まとすみす
とくし後此の古来凡が抄後賴にはわうとよ
さまよどり。短歌とよすりとくわうとよ
歌とよすき事藤義うまめしててくわうと
ひまほがよみじニくモ詠付べきや

後人不知の益す

庭の秋の

黒雲をすか三句代の二るとえ合すまよみね
の五音に三うるふ益すハナスムセのるとねりと
すくまうりやうすみすのとのれにせのとよあらそん

サ一まニ對すれ、ミヌカニテシル延テトヨ
セテ、トソアシテスルトヨ

貫之長歌

春、未だ、少々、とて、こ、ソ、ソ、ソ、ソ、
ト、ソ、モ、レ、ソ、マ、の、歌、と、ソ、
君、と、の、モ、ベ、リ、と、ソ、
ハ、萬、秋、ト、ス、リ、の、ツ、モ、
ミ、の、歌、に、別、れ、
ソ、衣、衣、ハ、萬、傳、歌、
ソ、ソ、ソ、の、ソ、ソ、
ト、ソ、

さと志峰 長歌

今、野、山、り、り、り、り、
近、東、ハ、中、重、よ、障、も、な、
九、月、ね、の、す、り、る、荒、の、う、そ、き、と、ソ、
エ、の、り、き、の、か、と、モ、リ、の、下、野、ひ、や、し、

つ、る、や、山、ひ、き、タ、シ、ト、カ、シ、キ、ヒ、ソ、の、六、月、ナ、
タ、リ、ハ、う、き、ミ、リ、リ、リ、リ、リ、モ、セ、年、
ア、リ、リ、ア、レ、ト、カ、ル、モ、ト、ト、ト、の、ボ、の、サ、ス、
セ、キ、テ、ア、ヘ、テ、の、ト、ト、歌、と、ト、ト、ト、ア、
キ、の、か、と、と、信、の、三、歌、の、三、の、ま、
く、ん、ヒ、ト、ト、ト、ア、リ、ハ、シ、ト、ト、モ、ハ、ン、を、
七、条、仄、中、玉、圓、す、太、政、平、基、徑、三、女、延、帝、の、
健、母、そ、モ、一、き、モ、リ、伊、後、七、条、仄、よ、え、レ、ハ、リ、
旋、頭、守、及、秋、よ、ま、一、月、月、キ、ハ、旋、以、守、と、モ、
く、て、く、う、キ、ハ、限、年、秋、と、モ、く、と、う、旋、以、限、
平、の、方、義、石、釋、ナ、リ、
旋、以、ハ、キ、モ、と、よ、シ、モ、ト、ソ、リ、ノ、限、ナ、

やよいとふくらやよろじつより
古今序より オリ^{タチ}とアリ^{タチ}と
旋ひ歌^{ハタカ}六^{ハタカ}初^{ハタカ}セス^{ハタカ}アヘ^{ハタカ}のすと
アモ^{ハタカ}トアモ^{ハタカ}トアモ^{ハタカ}トアモ^{ハタカ}トアモ^{ハタカ}
五七五七 五七五七 五七五七 五七五七

五七五七七 五七七五七七 五七五 五七七

ちましゆ もうしゆと、ねつじゆと
み音通じゆ いふことをとめとよ人
のじゆともとゆき

アラシヤマの事と云
やうんうれい古今

くくくく
きのわくとくとくとく

秋の夕景の如きは、即ちあらゆる物事の
あまめき、一層のいをのすゝみといふと可なり。

き風情（さかね）のけり。おまかせとよし
うけのうふ。えいはまなじくはあまうすき

のあと少しおとへねむのあと少しひ

うの水ありしに志の水ありしに水、水をも
そむくへ水のところへも水ゆるはすみゆる
室あらゆるありとけんとくまんじ

五七五七七
うちとすとうかくよめどすよれうのうたにうづけらるにゆせす
みせふみせす
君うそりすまうとおこなうくわうじゆくわうきまんくまんくまん
三首はモウナ
藤原

御モトミハ前のうへとておもむく、あきらめ

公、内へよしれりて、おきあらすとし

やのほへきわすれ、おけいじに煙と

顯照、ほよのひのひりあると我、やりひのうみ

事、ふ一よのうそと、うり立あ、うの煙

えうりうそと、うりと、うの煙

いもよつてのうみと、うの煙

のうみと、ねうりうそと、うの煙

月のうみか、うへ見ゆるおはきあくう

うりうそと、うの煙

おはきあくうそと、うの煙

うの煙のうみと、うの煙

ソノタキトナリトシテカモアヘヤハサの公
ソノ行ラムキハシノヨケニテミヒツヒテモ
ソノアミタキハナリハアヘタ
ホキ事トヨミキシルがスモトヨウキシタギタ
人の称さリトモクレフリシタキミのトリと
キミチ神の我力アヘマナヒ
カケキラムキタキタキタキタキタキタキタキ
ヒタキタキタキタキタキタキタキタキタキタキ
トキタキタキタキタキタキタキタキタキタキタキ
夜の月ナムアリム日アリム月アリム
止まてハシル
トヨヒトヨミタキタキタキタキタキタキタキタキ

ナムナリタキタキタキタキタキタキタキタキ

卷八
大秋叶打手

大秋叶ハ大内ノシリ西の士主の末
萬葉三門ノシリ西の
安富門ノシリ西の
左衛門の菊東上本門五
上西門ノシリ園書寮の末ヨウトウシ
ガ一町と大秋叶です。あふよ御めり親と内室
別當と補と大音今も毎年の事奇合ハ
底の日の節令も五節の算数すすみ年は大
秋の人物のとおす事あり。すて落闇の
風俗示す。唯る樂部の秋叶げにてより市に凡て

卷聖朝之樂曲和歌の東義とのそり改
定家の密勸もひは事のす5日月俱遡
鬼神争興非短處取及とひきより是賢
くのまふ事のあうて半右へう事
憚きのとよとえ未智名のうちこ
とひとも思ひの廢忘とすすまんま
きとひも思ひの廢忘とすすまんま
木にかわしつた

有あり大直日とく内との升すと
直とす宿直の公とあくます用の衣と直
れとも宿衣ともうつ中より大直日と宿節
含みとのかたりる群臣の詔旨する事と

梅に聖武天皇太平四年三月十六日太安殿上
出脚のりて舞妓と御覽のう 情大すのく
琴と川てえりす

のべてえ年にはめかへえぬまが天子
左のひづゝ日下紀よるとくわすりへ續日本
紀といふを書よどり事しづづくせしゆ
てじめきとひとつて一説よのくのとくひ
けぐりまとも日本紀へ返りへるまへれ
正統とよつて又正月十九日下御新ノ年
内本の年正月とえ祝ひりすまへ年下り義
きり樂とひとえかうとね遠みうり

やうきやまと岸の手

和琴と火舞の大和箋。り山未よ。岸これ

よりて秋もかほしきひとよ。月の頃の

春大奇合の辰日。の節合。の日。接岸と度と

琴川す人ふうり。滋賀のまよ。岸とまよ。春日

春の日。神もどりて岸とづらじ。し。めぐ

称とく。秋といひ。伊豆の代よ。うれ

まよ。許へやうきとよ。延長のねう。うき

の秋うら

うみやう。こま。うみの風。うらや。せんせん

字とやう。とじ。とじ。今。の代。猿樂。うみや

うみやうとじ。うみ。うみ。うみ。うみ。うみ

うみ

すよ。す。國のねう。うき。う風。う風。う

う風。う風。う風。う風。う風。う風。う風。

う風。う風。う風。う風。う風。う風。う風。

う風。う風。う風。う風。う風。う風。う風。

う風。う風。う風。う風。う風。う風。う風。

う風。う風。う風。う風。う風。う風。う風。

ウツミ二首萬ニ首う一首杪一首ノラキ
もやもじがうのすへにけ本末よ
うそえ神社ふの譜よとひに神い毎年
自傳の神主大育令の清暑堂をふ
事もじ

ひりめのす ひりめ天照太神の事之大ひ
あらしちと御名と後すゑに晝日の秋、
するうち神主へゆこも奉寄えはりよき
よみて天照やひりめ神と三ノ子をし
ますえへれこより約とじくらんのさしこうる
ミのむけのうげま歌と拾遺集より
ぬへんやくゆきじあさいこうてへうすとひき
のうよかくのうくきかづり古今のうく
の秋ハ本末のニ首とくりのうそよされや
うてうり、歴アセの神主よけ秋てゆき
おもりひりめの秋アキマ照と内神の天へ
のせよとくくうううううううううう
をけとくくうううううううううう
うたアヌリとくぬとねうじゆうじゆう
泊ヌとくにへ日よ保の歎く
のうとみた 玉御のす、唯る樂の律の
うた、源氏わだよううううううう
う様のうとくううううううう
まくはまうううううううううう

さうすれむよもとといぬ神主ハ一越御すと
准る事の御より奉りと申すと申ゆと云うし
西へねづくきひのすひ常よよがと前川の事也やは
にゆ天宣の大育ちの付延紀、近江主君、傳
じこま、傳中の國より御賛とてまげり付
えどりすべへ御賛とくすり
義作やくめいじゆくことからくとて
ニ主、清和天宣の大育ちの付主君の國義作
りの賛ともあまき秋、まみくとて秋
こよまくさ、いよくねせ
みゆくに用の石川、とすして、志よひん、万代もと
主、陽が天宣の大育ちの付延紀、義作の秋
東秋、とのうた、みかあら、東阿道、り山東
すまうり山のつまうたと云ふ

まづ代のかきりのうへ長濱へゆき松がれを
あはえみたと大音を巡紀伊根のすこ
の三のや徳のひととくとよがねてんすむ、お、おお
れ、延えの門の大音を巡紀伊の川のすこ
東秋 トのうたふか東山東河道より其
きよりかわづまたとよべ
ちのくに
りじた

この歌は元の曲のまゝ遊行するなり

かの風景とよみまのふう(き事
れ遠う(う)と人被り(う)はゆう)

冬の契成の会のうに

冬の美術家と、やくは源内家とふたりが盤膳と
らあらよすをひきのままで仕事としゆじ
時々美術のやりとりで、御ねどりぬりは
明神人よりは通行て、源時の名とゆく
とぞせりてよすをぬけのめに事すよす
が、天子小かずすいとくいづきとく行
ひとく思ふゆきとものゆてかきりつよう
せぬしの字とぬけのえを天金つまさんもと
けりうふ画とえほの事ありきわくそ

寛平元年十一月廿一日己酉ノ日すより
涼情の多とてまづとちてひじいな筆
中ね在念情平岸へ秋人へとのゝ人あり
東遊の事ありうれ情敏り却よみてえ
てよびまし秋と春せかくひやり古今集
延喜の帝ハ勅よしりて貫之ニまび推進を
あく义府ハ寛平の宣運となりせひて又
兵のひづけりとりまことと規模うして
其の終頭のせゆるをすましくやる
やく

よこりうかがひ思ふ工なり氣ふよこりうかがひ思ふ
やこりうかがひ思ふ工なり氣ふよこりうかがひ思ふ

古今集之釋，相傳祕說今書
密勸僻案五妙，漏脫事若之
堅可禁外見

桃華先生

相用一ノ葉一玉るす 東相用秋用
セニミテ セのうきめぐれひらへてはり人をせしり
月の病 痘疾用考
初やとい道くまきの患ひきりにせき人とまつとせしむた通
ウソアヘニシハナヨ 桜をさりけのまきそんしん 鮎
シキラムト おうす今も松風より多候ぬま木風竹の爲す是
アモキタハウクアツキシテ
サヌキテ ウツキシタハキニテツのまのまくにまきのとせしむ
サヌキのす、ハナ色あと森林の病、ヒトハシヒトヒトヨメテシハシヒトヒト
アモクシタハナトドリカクのハヤリトタマシの多のエスミシヤ 宿便
セホリハナトドリカクシタハタマシの多のエスミシヤ 宿便
セホリハナトドリカクシタハタマシの多のエスミシヤ 宿便
岸松用 玉枝用一するねオニル如ク
大丸もうち方れ立定あううのをすとと 佐助丸井水
芦薺用 田中三 鹤膝用日よの急に不禁上方ある處
其くねうす木下凡口にしげしててこもひの實をつりて 鹤膝用と
ナリラトリーハリ
のく木 一ノ葉引セヒキリと實をとてねく あらうき 葵な人来まく
ナリて 番中なく とうかと 旦實はく
扶 そよみととのせふと うりと

卷之三

すのまゝき うきよ くそと あらわすの實

まよく 一
ア酒意と仰りて おまけに おまけに おまけに
まよく 一
ア酒意と仰りて おまけに おまけに おまけに

たとへぬをきのくわうすとおひなたのよしむら

وَنَحْمَانَ وَهُرَيْلَةَ وَهُرَيْلَةَ وَهُرَيْلَةَ وَهُرَيْلَةَ

アラバマ州の州都モービルは、アラバマ州の北端に位置する港町で、アラバマ川の河口に面している。アラバマ州の政治、経済の中心地であり、また、アラバマ州の文化、教育の中心地でもある。

家事の事は、おまかせをうながす。夫婦の事は、夫の手で決める。夫婦の事は、夫の手で決める。

うへひよめかへり。さしにねらひよめかへり。左右手各三
枚。腰袋の物二つとも。け物である。銃刀。

えまくとひをなすかく 何者もおはづけ
日たまくまくとひひきえてさしてしんぐれ

まことに、おまかせをうながす。おまかせをうながす。

وَهُوَ يَعْلَمُ بِكُلِّ شَيْءٍ

まくして死んで、おこじ和のうのみやのせんをあわせ思ひ、一けさす

かへりておひでにまつたる人にはうそをつくふの事無く
まことに金取らぬと心づき

四百二十字を用ひて次

アキラカのそへゆく
かのじのまほ

二つ三本のちぢれすの、ぬけ後れぬ 田代うねり田の牛まくとて太豆と

やうのと おれがきなえ
こねよとおれにほれまうり うのね

うよ／なまくらす／のま／とく／

人のあいじんとよきわざす遣筆す
赤絵、たまご牛のとこ、とくとく、とくとく

エリヤハのやうな事とあらへて、

やう くらまのよじりやう

黒文臺 羽鳥ひなた蓋に、並入御きぬ赤墨長打と
一反三合蓋ラフセテ里 異音ナシ

尋常念 文臺 玉墨く、双蓋又ヒ文臺有御、ヤマサルツモ皆双蓋ニ
又用扇 又用扇 玉墨く、双蓋又ヒ文臺有御、ヤマサルツモ皆双蓋ニ
及五六首、二行ニ有ミヒ三行 及五六首、二行ニ有ミヒ三行

そぞかすこ いはゆ えほりあわせトス

す て義ノ 月ニ いはゆ 月ニ 桜葉ノ 盛言葉ノ

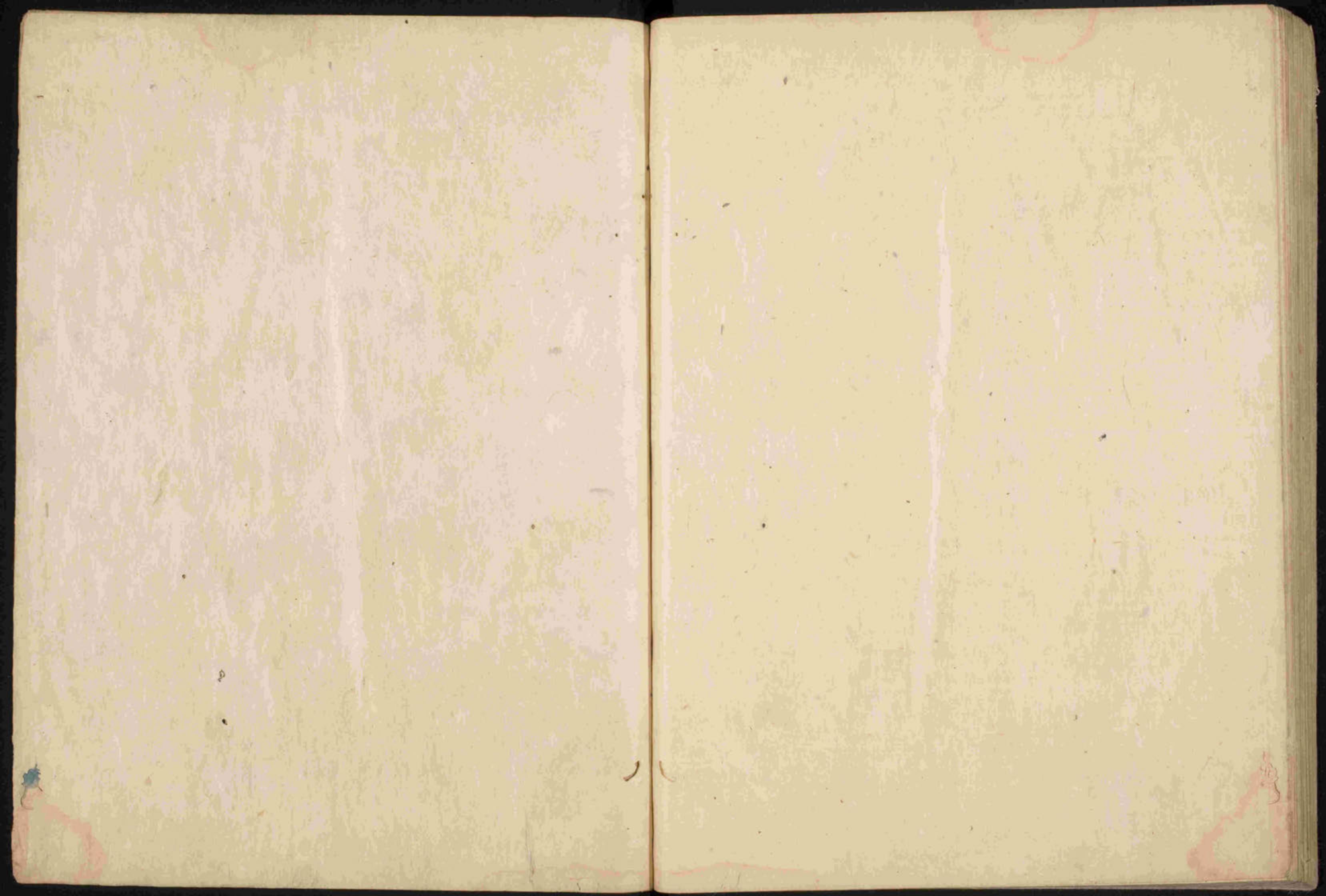
おもふる ナ六用タノ

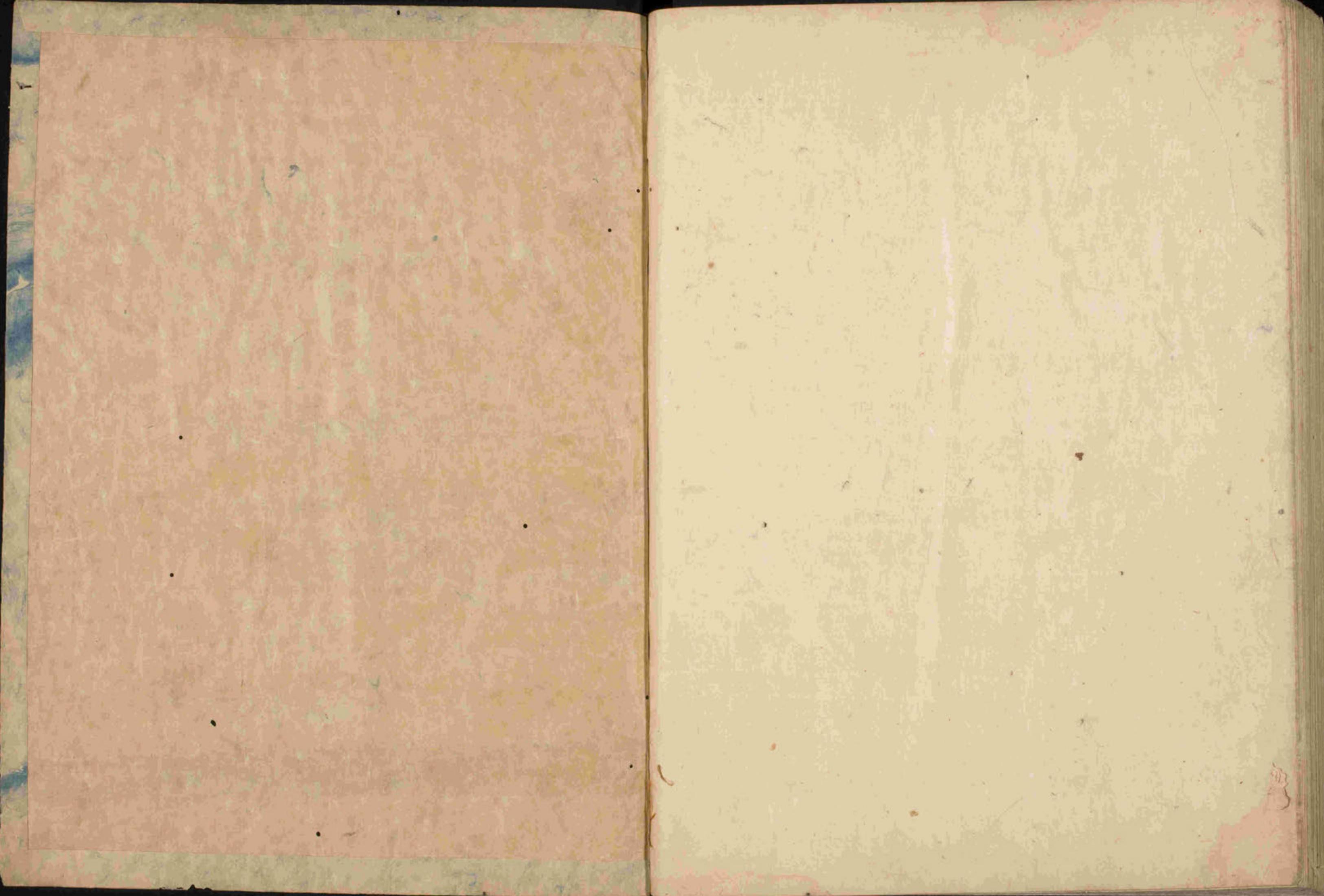
背き わ筆に ひたまち そよがひえ 露吹キス うすり音前
ぬしき ねどよねうり しのぶみのののゆき いろみく 一 そよがひえ 実葉と
ひらひ まみべ まみべ しのぶみ うめうめとよと
下毛 超松深木及毛 ひらひ まみべ まみべ まみべ まみべ まみべ まみべ まみべ
東風 安田乃奇是く ひらひ まみべ まみべ まみべ まみべ まみべ まみべ まみべ まみべ

竹林後風恩う、種宣麻下御便也
竹脚草り書寫之、つ今五付
詔事小、お只脚り種宣もと起
う御沙引義公家から

神祇院御攝政







110X
89
1